

佳作

「健診をキチンと受けること」

匿名希望さん

「ここにガン細胞があるね」

先生から言われた日のことを、私は生涯忘れないだろう。私は去年、しかもこの半年の間に結婚をし、ガンによる闘病生活も送った。式を挙げ、これから結婚生活スタートというタイミングでガンが見つかったのだ。

始めは、会社で毎年受けている厚生連の健康診断だった。超がつくほどの健康体なので飲むのが大変と聞くバリウム検査は受けたことがなかった。ただ今年結婚したこともあり受けてみることにした。

結果がひと月後に出て、バリウム検査が再検査になった。慢性胃炎の疑いだったが、とくに不安視はしていなかった。元々胃腸が弱めで、胃が痛むことはよくあったからだ。健診時たまたま調子悪かったのだ、というぐらいに思っていた。

家の近くの病院で胃カメラ検査の予約をした。検査室に案内されながら看護師さんから「今日の先生は若いのにとても上手なのよ。初めてだからよかったわね」

と言われた。この先生が普通なら気づかない小さなガン細胞を見つけてくれたのだ。

結果を聞きに行くと、先生から胃にガン細胞があることを告げられた。信じられなかった。胃カメラの写真を見ても、かすかに赤く腫れているくらいだった。これがガン？ウソでしょ？

心臓の鼓動は激しく、一瞬アタマがまっ白になった。でもアタマの奥の奥は冷静で先生と会話をしていた。本当にガン細胞といっても極小だから大学病院でよく診てもらい、最悪、胃の三分の二を切除することになること、この前の胃カメラ検査を担当された先生の大学病院が、内視鏡に力を入れているから、そちらへ行ったほうが良いなど、先生と淡々と話しをしている自分に驚いた。

家に帰って夫に話をした。夫はその時、驚いたとも困ったともわからないよ

うな顔をした。一瞬、絶句した。

「一緒にがんばろう」

そう言ってくれてうれしかった。病院では泣かなかったのに、夫の声では大声で泣いた。

紹介状を持って大学病院の、あのガン細胞を見つけてくれた先生を訪ねた。先生も肉眼ではわかりにくく、染色検査で分かったという。大きさにして一センチほど。若い年齢は進行が速いため、いくつも受けなければならない検査を、手術までにひと月かからないよう予定を組んでくれた。しかし週に何回も病院に行かなければならないこともあり、仕事を休む都合上、会社に秘密にはしきれなかった。同僚の女子と上司にだけ報告をした。

大学病院では、精密な胃カメラ・CT・レントゲン等たくさんの検査をした。どれも人生初めての検査だった。

検査をしては結果を聞き、また別の検査をする。検査が始まった段階で、両親へは報告をした。ガンと聞いただけで、人は死を連想する。自分もそうだった。とくに自分の親は憔悴した。それでも検査や手術に付き添ってくれた。

たくさんの検査と外科の先生と相談した結果、内視鏡でガン細胞周辺の粘膜を取る手術をすることになった。私のガン細胞のタイプは、本来なら胃の切除しか方法がないらしい。それでも早期発見で小さいこと、リンパに転移がみとめられないこともあり、まず粘膜を取ってみて、それでダメなら切除するという二段階で決まった。

手術の前日に入院し、翌日手術。術後経過が順調だったので、一週間で退院した。手術は数時間かかった。術後夜中に目が覚めたとき、胃にすごい違和感や痛みがあった。

場所が場所だけに、食べるものが制限されたのはキビシかった。入院中は重湯だったし退院後もひと月ぐらいお粥生活だった。一生油ものは食べられないかもと本当に思った。

退院してから二週間後に病理の結果がでた。ここでガン細胞が取り切れていなければ、胃を切除しなければならない。

結果は、手術によってガン細胞は取り切れていた。転移もなかった。ガンに克つたのだ。

その瞬間は夫と手を取り合って喜んだ。ガン細胞があると言われてから2ヶ月。この2ヶ月は新婚生活とは言えなかったと思う。

会社の健診でバリウム検査を受けていなかったら、ガンの進行具合によっては、今頃は手のつけられない状態になっていたかもしれない。普通なら見落としてしまうような小さなガン細胞を先生がたまたま見つけてくれたから、今こうして日常が送ることができるのだ。2ヶ月でガンが治ったなんて、奇跡だと思う。本当に、病院の先生、両親、会社の上司・同僚、そして夫には感謝している。そして、健康診断はキチンと受けようと周りにも伝えていきたい。